

# 人間発達科学 I

## 第6回

発達とはなにか①

# (1) 発達をどう考えるか

## ①〈発達〉概念の基礎

### ■ development(発達)の語源

development = de + velop + ment

de- : 除去を示す接辞

velop : volvo(ラテン語の「包む」)から派生

ment : mens(「心の日常態」)から派生

→「心の包みを開いて内なるものをさらけ出す」

という意味で18世紀に成立

---

## ■ 〈発達〉の一般的な定義

「単なる成長や量的増大ではなく、多くの構造や機能が統合される複雑な過程であることを前提として、「完態という目標に向かって進む秩序と一貫性のある一連の前進的な系列」(ハーロック)である。」(藤永保ほか編『新・教育心理学辞典』金子書房、1977年、など)



「完態」という目標への「前進的」な変化

---

# ピアジェ (Piaget, J.)



(1896年～1980年) <http://faculty.frostburg.edu/mbradley/psyography/jeanpiaget.html>

---

## • ピアジェの経歴

- 1896年 スイス ヌーシャテルで生まれる。
- 1918年 ヌーシャテル大学で軟体動物研究で理学博士
- 1919～20年 心理学と精神医学を学習
- 1923年 結婚。『子どもの思考と言語』刊行
- 1925年 ヌーシャテル大学心理学教授。
- 長女ジャクリーヌ誕生
- 1927年 次女リュシエンヌ誕生
- 1931年 長男ローラン誕生
- 1940年 ジュネーブ大学実験心理学教授に就任
- 1952年 パリ大学発達心理学教授に就任
- 1980年 死去

---

## • ピアジェの方法

### ■ 「臨床法」

- ・子どもにさまざまな作業を行わせ、課題について考えさせながら、なぜ子どもがそのように考えるのかを解明しようとするもの。

### ■ 「日記法」「日記的観察法」

- ・ある子どもに毎日同じ作業を課してそれに対する子どもの行動の変化を観察。
- ・子どもの自発的活動を観察

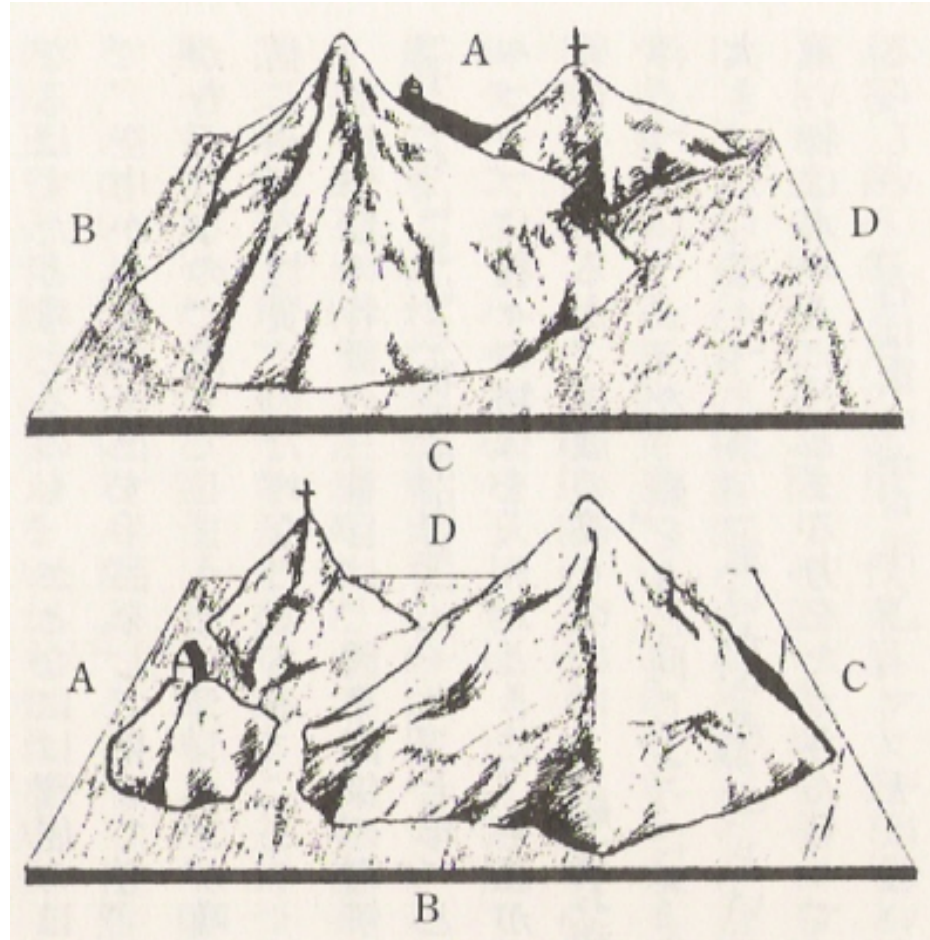
(ボーデン、1980年)

---

## ・ピアジェの発達段階説(石田ほか、1995年)

発達段階	年齢の範囲	達成可能な典型と限界
感覚運動的段階 (誕生～2歳)	誕生～1ヶ月 1～4ヶ月 4～8ヶ月 8～12ヶ月 12～18ヶ月 18～24ヶ月	反射的活動を行使し外界を取り入れる。 自己の身体に限った感覚運動の繰返し。 視界から消えた対象を探索しない。 消えた対象を探すが、元の場所のみ。 外界を変化させる自分の動作に興味。 真の心的表象の始まり。延滞模倣。
前操作的段階 (2～7歳)	2～4歳 4～7歳	言葉や心的イメージの発達。自己中心的。 スキルの改善。保存問題に知覚次元で。
具体的操作段階 (7～12歳)		具体的事物で論理的操作が可能。科学的問題などは不可能。
形式的操作段階 (12歳～ )		仮説による論理的操作が可能。抽象的概念や知識の獲得が可能。

## 三つ山問題



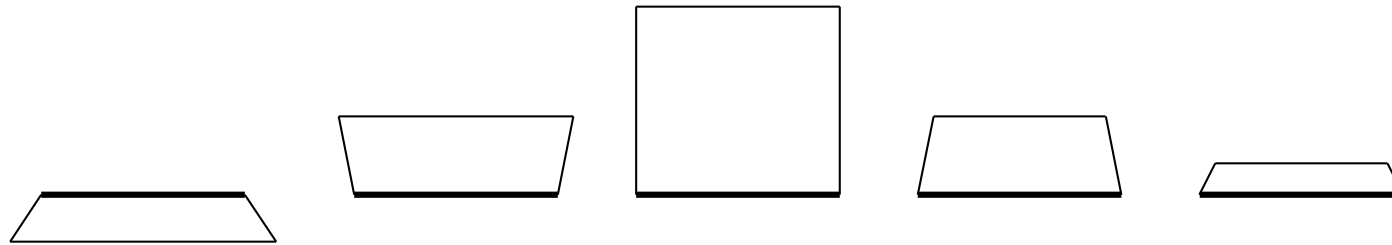
(永野、2001年より)



# • ピアジェ発達段階説への批判

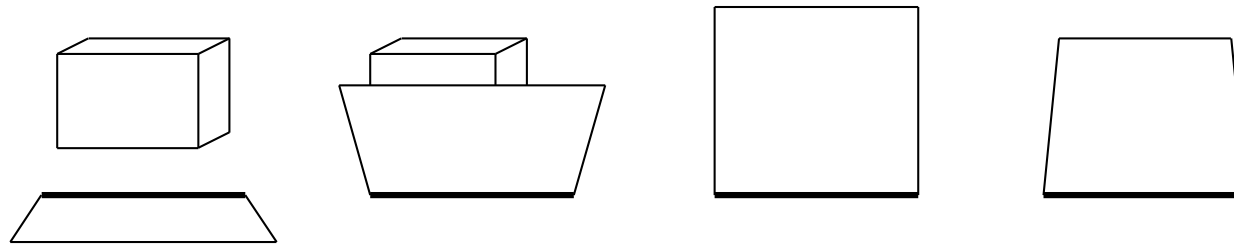
## ■ 「感覚運動的段階」への批判（無藤、1994年）

馴化

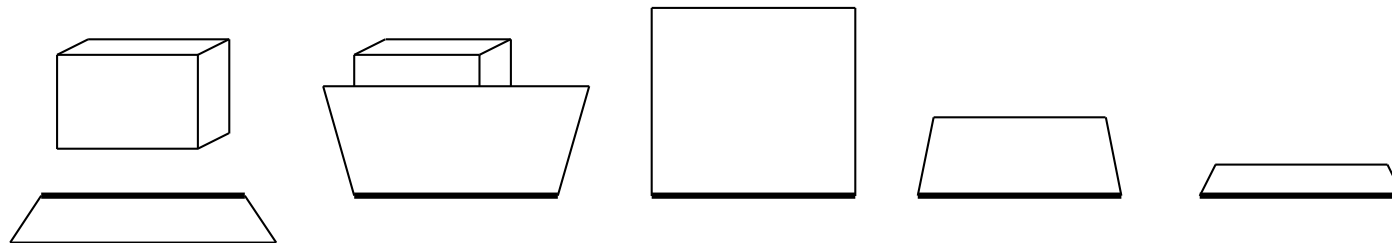


テスト

A



B



---

- 「前操作的段階」への批判

- ・ 質問が不自然
- ・ 自己中心性を強調しすぎ

- 研究方法への批判

- ・ ある段階から次の段階への移行は不明
- ・ ゆるやかな変化はわからない

- 12, 13歳以後の発達段階が不明

- 歴史的社会的文脈を重視しない

⇔ 発達段階の重視

---

---

## ②生涯発達の視点からみた〈発達〉

(バルテス、1993年)

### ■ 生涯にわたる過程

- ・成人期以降の発達を視野に入れる
- ・どの年齢にもそれぞれに価値がある

### ■ 多次元性

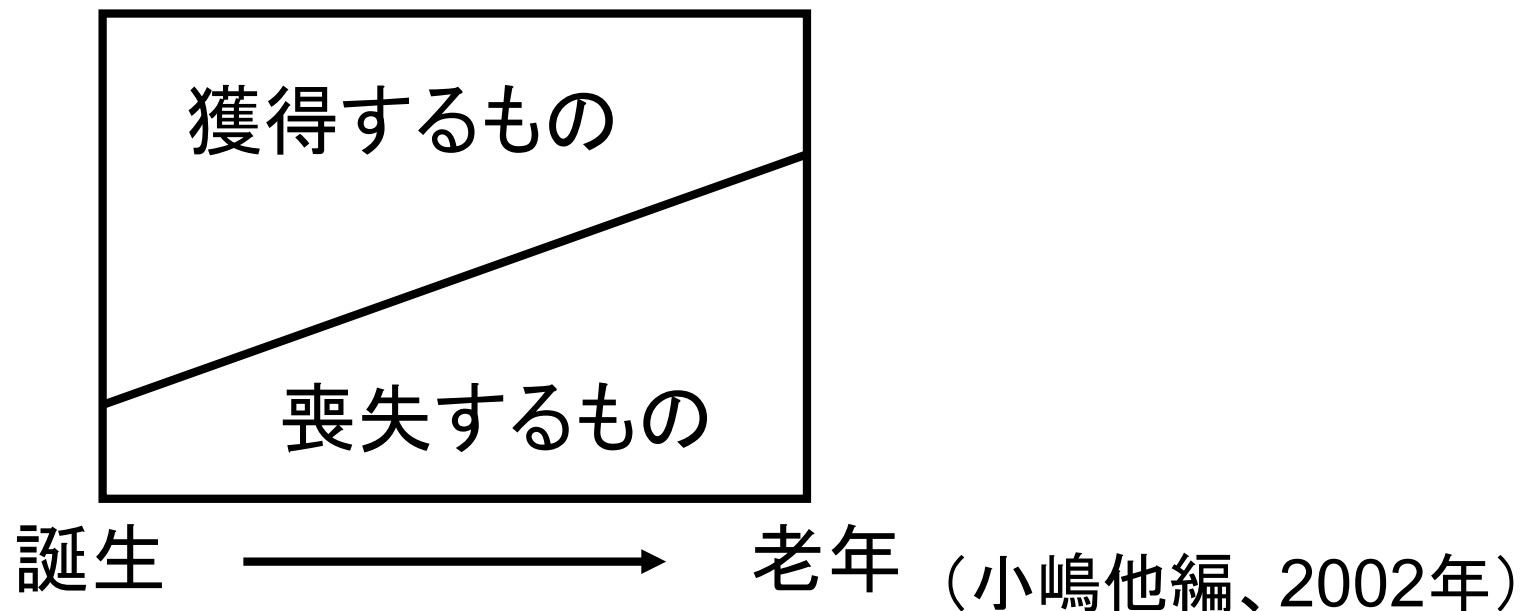
- ・ある能力はその下位構成要素からなる  
(例えば、流動性知能と結晶性知能)

### ■ 多方向性

- ・正の方向への変化だけでなく負の方向への変化も含む
-

## ■ 成長（獲得）と衰退（喪失）のダイナミクス

- ・どの時点のどのような発達的变化も、新しい適応能力の獲得と同時に、すでに存在していた能力の低下をも示す。
- ・獲得と喪失の割合は年齢とともに変化する。



# 知能は年齢とともにどう変化するか？

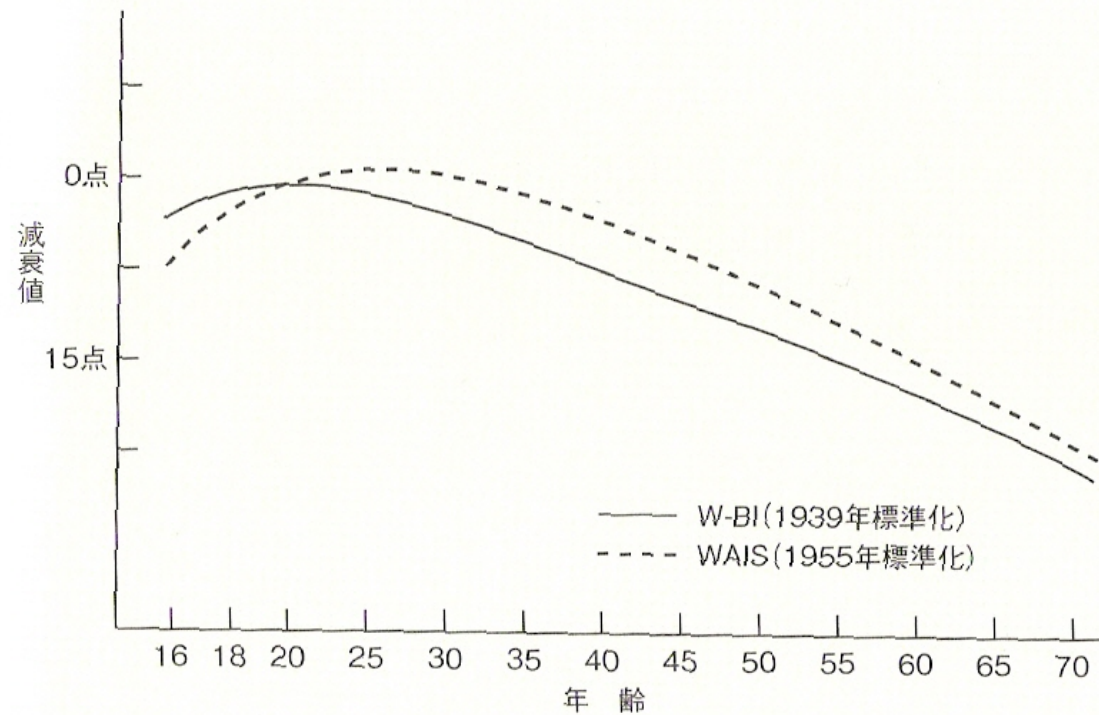


図7・1 ウェクスラによる知能の減退曲線

1939年と1955年の標準化データはいずれも成人以降に知能が低下することを示している。

(村上、2007年)

---

## ■ 横断法

- 異年齢集団を同一時点で調査
- 時代効果が調査結果に反映
- コストがかからない

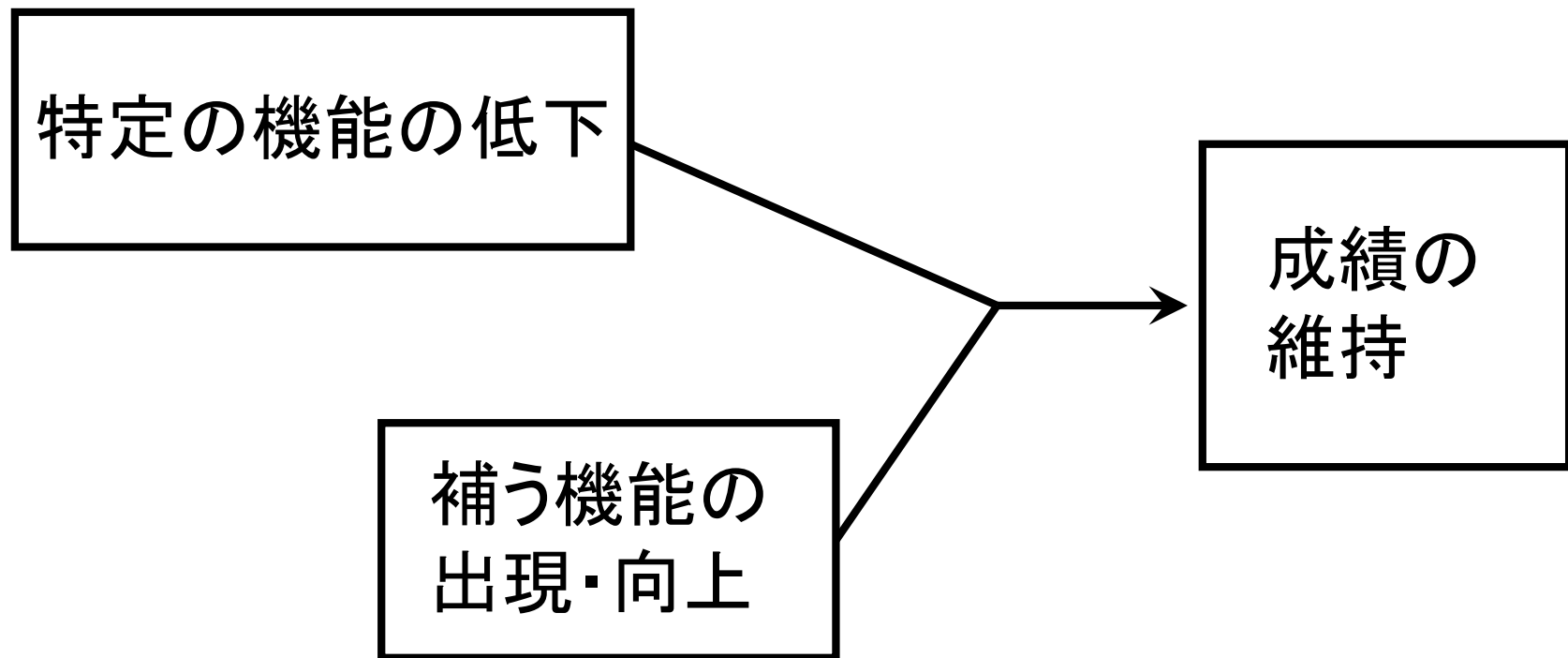
## ■ 縦断法（重複サンプル法）

- 特定の集団を追跡調査
- 年齢による因果関係の推定が可能
- コストがかかる
- 再検査効果
- 脱落効果

## ■ 独立サンプル法

- いくつかの年齢集団（コーホート）を追跡調査
-

- ・適応の過程には選択的最適化と、それによる補償（代用）がある。



補償的变化の可能性

（小嶋他、2002年）

---

## ■ 発達における可塑性の存在

- ・時間やコストがかかるにしても、どの時期にも可塑性は存在している。

## ■ 多様な影響システムによる被規定性

- ・年齢に伴う要因（心身の変化など）
    - ・古典的発達理論の基礎
    - ・低年齢で大きな影響→個人間の類似性
  - ・歴史的・社会的文脈という要因
    - ・加齢とともに影響増加→個人間の多様性
    - ・フリン効果
-



## 平仮名の読み書き能力の時代変化(正答率%)

文字	の	な	む
テストの種類	読み 書き	読み 書き	読み 書き
1947年 小学校入学時	48 26	26 12	14 4
1956年10月 幼稚園5歳児	78 78	78 62	72 32
1961年12月 幼稚園5歳児	100 100	100 76	98 52

(永野、2001年)